

2021年5月20日開会 (通算108回)

例会開催日は、木曜日です。

開会点鐘・歌の斉唱

我等の生業

会長挨拶

皆さん、こんにちは。

3度目の緊急事態宣言により、再びネットでの例会になってしまい非常に残念です。第4波となる今回は今までとは少し違い、感染力の強い変異株による急速な感染拡大が問題となっております。イギリス株(N501Y)は従来株の1.2倍～1.6倍の感染力を持ち、今迄は比較的重症化しにくいとされていた若年層への感染の拡大と重症化が報告されています。さらにインド株(L452R)は、日本人の6割が持つ白血球(ヒト白血球抗原)がつくる免疫細胞から逃れる能力があると言われています。この拡大を阻止できるよう、今まで以上の徹底した感染対策を行なう必要があると思います。

話は変わりますが、先日7歳の息子とお風呂に入っていると、こんな質問を受けました。

息子「毛は大事な場所をまもる為に生えてるんでしょ?じゃあ足のお髭はなんで生えてるの?」ちょっとウケた。確かに髪の毛は頭を護るため。まつ毛は目を護るため。股間の・・・大切です。と言うことで、今回の四方山話は「ムダ毛」です。

それでは、ムダ毛がムダ毛と成ったのはいつ頃なのでしょう?なんと紀元前4000年ごろには、既に脱毛という概念はあった様です。紀元前4000年ごろといえば人間が道具を使い始めた石器時代です。当時は紐で毛を絡めて抜いたり、硫黄や石灰、デンプンを含んだ脱毛剤を作り、ワックスみたいに塗ってムダ毛を処理してたそうです。あのクレオパトラも蜜蝋と砂糖を混ぜた脱毛剤の様なモノを使って脱毛してたという記述が残されており、遺跡の中にカミソリのような物も見つかっています。また、ローマ時代には男性もムダ毛処理をする様になり、今で言うメンズエステの歴史も始まっています。

日本では平安時代に脱毛の歴史が始まっています。貴族の間では額のムダ毛を抜いて、足りない部分は墨で書き足していた様です。江戸時代になると、手足や陰部、眉の脱毛が始まり、軽石で体毛を挟んで擦ったり、線香で焼くという方法で処理してました。明治には薬品や電気を使ったさまざまな脱毛法が考案されています。アメリカでは1916年に電気分解脱毛器が発売され、日本でも1960年からワキの脱毛が流行し始めた様です。

ムダ毛処理の考えが定着したのは、家庭でのカミソリの普及と共に広がって行ったようで、大手シェービングメーカーのキャンペーンがきっかけだった様です。ムダ毛とされるパーツは時代と共に変わっていき、ノースリーブのド

レスが流行れば脇となり、ストッキングの材料であるナイロンが不足した時には、女性は素足で過ごすことが多くなり、足の毛を剃るという文化が生まれました。

現代の日本ではどうでしょうか。女性のムダ毛処理は当然とされる時代において、最近では男性もムダ毛を気にする人が増えて来ました。実際、私の友人でも髭を脱毛している人は数人いますし、中には全身を永久脱毛した強者までいます。脱毛した人に聞くと皆さん口を揃えて「凄くイイ!高橋君もした方が良いよ」と……。また最近では、自分に介護が必要になった時、ヘルパーさんにお手間をかけさせないよう脱毛する方が急増しているそうです。しかし、現在の脱毛機械は黒いものに反応しレーザーが照射されるものが主流なそうですが、なんと「白毛には反応しない」そうです。つまり、永久脱毛したいのであれば、白毛になる前に完了しなければならないと言うことです。……。時間がない。

話が長くなりましたが、「ムダ毛」という概念は、個人は勿論、国や宗教によっても違います。その時、その場所での公衆衛生の面から判断をして、他人に不愉快な思いをさせないという事が大事なんだと思います。あとは個人の自由ですのでどうにでもしても良いとは思いますが、ムダ毛も人間が生きていく上で何らかの役割を果たしていて、何千年、何万年という長い年月をかけて選び抜かれた精鋭達であることも忘れないで欲しい。

今月は青少年奉仕月間。来月6月はロータリー親睦活動月間です。また皆さんと親睦を深められる日を楽しみしていると共に、早くコロナが終息し、普通の生活に戻る事を切に願います。

幹事報告

- 本日は新型コロナウイルス感染症拡大予防の為、HP上(E方式)での例会開催となります。
- 地区研修協議会第2部(対象:会長幹事を除く役員・理事及び委員長各位)は5/31まで地区HPにて配信されております。まだ視聴されていない方はご視聴お願いいたします。
- 5/11(火)に豊田中RC例会へ2018-19年度奥村会長、鈴木幹事にて表敬訪問してきました。
- 5/23(日)に開催予定だった会長エレクト研修パートⅢは対面方式から書面による質問回答方式へと変更になりました。
- 5/7(金)に名宮会のゴルフコンペが開催されました。次回は6/10(木)に会長杯を開催予定です。
- 5/25(火)13:00～16:30で「日本のロータリー100周年を祝う会 記念式典・祝賀会」がYouTubeオンライン配信されるそうです。是非当日は下記よりご覧ください。
日本のロータリー100周年を祝う会 記念式典・祝賀会(オンライン配信)
【次第】日本のロータリー100周年を祝う会 記念式典・祝賀会 2021/05/18現在
- 下記、愛知県警察本部からの情報提供です。
組織窃盗グループによる医師、自営業、会社役員宅を狙った被害が多発しています
の情報提供です。
- 本日11:00～次年度予定者CAをZOOMにて開催いたしました。
- 次回例会6/3(木)12:10～@若宮の杜迎賓館1階「橘の間」
現状は会場開催を予定しておりますが、新型コロナウイルス感染症の感染状況により開催方法が変更となる可能性がございます。
例会前11:00～第2回次年度予定者理事会、例会後に第12回定例理事会の開催を予定しております。
状況を見てまたご連絡申し上げます。

委員会報告

【出席委員会】

・出席率

(前回)

第107回通常例会(5/6)

出席率:47/47名 100%

※出席免除者除いて計算

その他

～会員スピーチ～

佐野洋一郎会員より

自分に合う勉強～学習スタイル～

イズム進学会の佐野です。

今日は、学習塾を生業としている私ですので、「勉強のしかた」に関係する話です。お子さんの勉強の話ではありませんが、よくよくご理解いただくと、組織の中での人材育成に通じる話でもありますので、ぜひ、宮の杜の皆さまにはご参考にしていただければと思います。

では、弊社で行っている、一人ひとりの成績を上げるために一人ひとりの学習に対する適応性を的確に把握する「学習スタイル」についてお話しします。内容でわからないところがございましたら何なりとご質問ください。宣伝ですが、勉強の仕方のもう少しわかりやすい本を現在執筆中です。6月末までにはアマゾンのオンデマンドで発売できたらと思っていますが、そんなことを言いながら1年がたっていますので、遅れるかもしれません。もし発売されたら、ぜひお買い求めいただけましたら幸いです。話がそれですので、本題に。

子どもたちの学習で、非常に能率よく勉強が進む場合と、がんばっているつもりなのに一向にはかどらない場合といった、両極端なことがよく起こります。これは、「勉強のしかた」にも、いろいろな型があり、自分のタイプ(学習に対する適応性)にあった方法で勉強できたときと、そうでないときの違いによるものです。イズム進学会では、この勉強のしかたの型を「学習スタイル」と呼んでいます。自分の学習に対する適応性を的確に把握して「学習スタイル」を見つけることこそ、毎日の学習を意味のあるものにするうえでもっとも大切なことです。イズム進学会は、子どもたちの学習に対する適応性の把握のために、学習スタイルの中からまったく逆の2つのタイプ「反復練習を得意とする動作タイプ」と「問題解決を得意とする思考タイプ」を取り出して、どちらの特徴が強いかを調べています。このタイプをもとに、さらに細かく分類し、学習を意味あるものにする一人ひとりの学習適応性とそれをもとにした「学習スタイル」を判定し「学習スタイル別指導」を行っています。以下、その内容を若干硬めにお話しします。

I 学習スタイル別指導

教えるものにとって、学習効果を高めることは永遠の願いです。その点で、学習効果を高めるための研究は幾多となされていて、その内容も多岐にわたります。しかし、それらの多くは、子どもたちの「能力や適性」を、それぞれの側面から規定して、その既定された条件に見合った理論や方法が提案されています。しかし、ここで述べる「学習スタイル別指導」は、個々の生徒の能力・適性を測定するのではなく、未知なる可能性を秘めた子どもたちが、具体的な学習場面で、どのような反応や適応を示したのかを別々に「類型化」し、逆にそれを学習に活用する方法をとっています。そのような意味で、まずは生徒の思考類型を把握する必要があります。それは、生徒の能力や適性の機能のパターン化をはかり、それに即した教材や学習方法を提供することによって、学習効果や意欲の向上をはかるためです。思考類型を類別するときには大きく分けて3つの要因に注意する必要があります。第一に「問題解決要因(問題解決に代表される洞察・思考・創造を主とした学習活動)」、第二に「反復練習要因(反復練習に代表される記憶・模倣・再生などを主とした学習活動)」、そして第三に「学習に対する態度要因(学習習慣、学習意欲、苦しさにも耐えて努力するなどの態度の有無)」です。これらを総合し、個々の生徒の学習のスタイルは「問題解決」と「反復練習」のそれぞれの要因に対する適応性の度合いと、学習に対する態度要因の度合いによって構成されています。個々の生徒がどの要因に適応しているかを調べるための判定に使用する質問項目は、おおまかには以下の通りです。

I (問題解決に関わる応答)

- ・問題を解く際、見通しを立ててから取り組む
- ・解き方を自分なりに工夫できる勉強が好き
- ・熱中するとつい時間を忘れて勉強する
- ・文章問題を解くとき、図や絵を描いて考える
- ・複雑な計算問題は簡単な方法を工夫する
- ・ノートには自分なりに考えをまとめて書く
- ・あまり細かく指示されると嫌になる

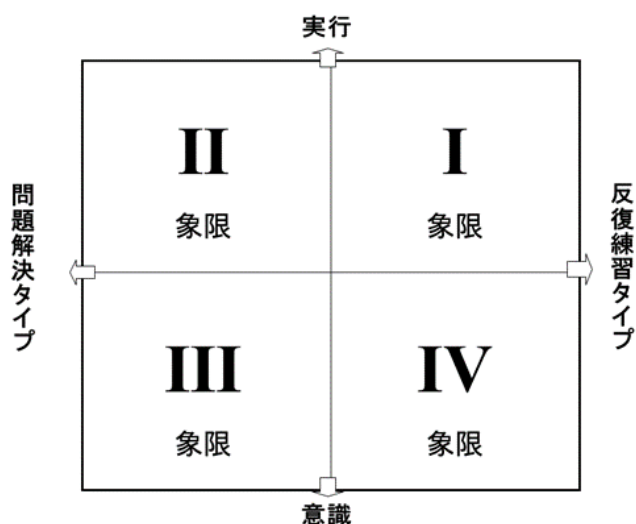
II (反復練習に関わる応答)

- ・考えたり調べたりするより、記憶中心の勉強が好き
- ・公式をあてはめて解くような勉強が好き
- ・漢字や計算ドリルを使うような勉強が好き
- ・解法例や類題を用意してくれる授業が好き
- ・難問や長文にあたると、途中で嫌になる
- ・重要な部分には線を引いたり抜き書きしたりする
- ・忘れ物をする事は少ない

III (学習に対する態度に関わる応答)

- ・自分に合った勉強の仕方を持っている
- ・テストの前は長時間勉強する
- ・嫌いな科目でも勉強する
- ・宿題や課題はきちんと提出する
- ・他の人に言われなくても進んで勉強する
- ・宿題があってもなくても勉強する
- ・先生の言ったことはきちんと守る

以上の質問を参考にしつつ、生徒がどの要因に適応しているかを判断します。次の表は、個々の生徒がどの領域に属するかを、縦軸、横軸を設定して象限別に分けてあるものです。



まず、縦軸ですが、これは個々の生徒の学習に対する態度要因の量を表す軸です。分かりやすく言えば、自分の思ったことや決意したことを具体的に実行できるか(意識と実際の差が少ない)、実行できないで思っているだけなのか(意識と実際の差が大きい)を、量的に大小をつけたものがこの軸になり、上へ行けば行くほど実行レベルが高いということになります。

次に、横軸ですが、これは問題解決と反復練習に対する適応度をあらわしたものになります。思考タイプに偏れば偏るほど、問題解決的な能力を有するということになり、動作タイプに偏れば偏るほど、反復練習的な能力を有するということになります。以上の類別を前提として、それぞれのタイプに適応した誤答分析法と指導法を提示していきたいと思います。そこでまず、各象限に属する生徒の特徴と生徒への対応を挙げていきたいと思います。

<生徒の特徴>

I 象限に属する生徒達は、一般に真面目で、学習習慣もついていて、家庭学習や与えられた課題にも積極的に取り組む姿勢がみられます。コツコツ努力をするタイプであるので、反復練習教材や記憶中心の学習に対しては高い到達度を示します。しかし、自分で解き方を工夫したり、自分の考えをまとめたりするような問題解決的な学習にはあまりなじまない傾向があります。

II 象限に属する生徒達は、一般に学習習慣もついていて、知的な関心も高く、勉強にも意欲的に取り組みます。また、作業を伴う学習や、反復練習的な教材にも適応する柔軟性も持ち合わせています。所謂「良く出来る子」といわれる生徒が属する象限でもあります。論理的な思考を好み、自主性や自発性もあります。

III 象限に属する生徒達は、基本的にはII 象限の生徒たちと同じタイプですが、相違点は、継続力や持続力、集中力に欠けるために、学習の習慣がついていないことです。

IV 象限に属する生徒達は、基本的にはII 象限の生徒たちと同じタイプですが、相違点は学習習慣がついていないことです。

<生徒への対応>

I 象限に属する生徒達には、パターン学習を習得させることが重要です。覚えることが得意でコツコツ努力するタイプの生徒なので、問題を解くためのパターンを覚えさせ、それを使いこなすため多くの問題にあたることが重要です。この象限の生徒は覚えることに自信を持っているので、どうしても考えることより覚えることが中心になってしまいます。そのため、学年が進み教材が難化すると、覚えることが多くなって消化しきれなくなり、そのことが学力の低下の原因になっていることもよくあります。そのため、この象限の生徒の特性を生かして、問題を解くためのパターンを覚えさせそれを活用して学力を高めていくことがこれらの生徒に適した学習方法といえます。

II 象限に属する生徒たちには、学習面を含め、自主性や自発性を育てていくことが重要となります。自発的な学習を好み、自分が興味を持ったりしている分野に対しては、時々ものすごく専門的な知識を持っていることさえあります。しかし、この象限の生徒たちに共通してみられる欠点は「語彙」が乏しいために「発想の素晴らしさ」を文章化したりすることができないことです。その点で、語彙力をつけさせることが重要となってきます。また、じっくり腰を据えて学習に取り組み、持てる力を十分に発揮できるような対応(知的好奇心・挑戦意欲を掻き立てるような教材)が必要となります。

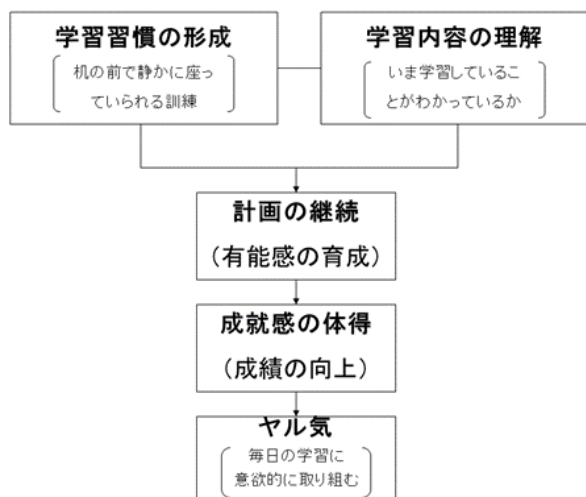
III 象限に属する生徒には、一般的に、ある程度、自分の能力に自信を持ち、現状を正当化するタイプであり、押し付けられたり支持されたりすることを嫌がる傾向が強いので、「やればできる」とことと「実際にやること」の違いを具体的に示してやる必要があります。これらの生徒には自意識が強い・理屈っぽいといった特性に見合うような「解説部分が多い教材」が適しています。

IV 象限に属する生徒には、とにもかくにも、規則正しい予習・復習などの学習習慣の形成が基本です。また、「有能感を抱かせ、やる気を起こさせる」ことによって学習意欲を高めさせる必要があります。この象限の生徒は、一般的には素直で他人の指導や助言を受け入れやすい特性をもっているため、学習の内容や学習方法を具体的に指示し、実施状況の確認などきめ細かな対応をすれば、学習に打ち込める可能性をもつ生徒でもあります。

II 「やる気」の喚起～どのように努力させるか～

よく「やる気」という言葉が使われますが、やる気というものは子どもたちが持つ固有の能力・適性ではありません。子どもたちを取り巻く様々な条件が伴わないので子どもたちは「やる気のない状態にある」だけです。よく、「やる気のある子と、ない子」の集団を対比する捉え方が見られますが、実際には特定の条件が揃えば誰でも「やる気」を出して、目標に向かって意欲的に取り組む姿勢を示すという機能的な働きを持つものであるのです。しかしながら、やる気を出して取り組ませるためには積極的にやる気の障害となっている事柄を克服させるための指導が絶対条件となっているので、やる気というものは座して待つだけでは出てくるものではないことがわかります。では、「やる気」を出させるための条件とは何でしょうか。その条件とは、ばらばらで独立したものではなく、それぞれが

관련된構造的な体系で成り立っているものです。具体的には、まず、【学習習慣の形成】と【今やっている学習内容の理解】をしっかりとさせること、その後で【計画の継続】をして、【成就感の体得】をさせれば、自ずと「やる気」が出てくるものです。次の図はその流れを模式化したものです。



以下、これらの内容を詳しく見ていきます。

① 【学習習慣の形成】

毎日規則正しく勉強するための第一関門は、「机の前にじっと座っていても平気である」という習慣を身につけさせることです。それをさせるには、具体的には子どもたちを「勉強させる」という認識よりも「じっと座らせる」訓練をするのだという認識を持って対処することが大事です。このことは毎日訓練を重ねているうちに身につけてくるものですから、何を勉強するというような学習内容にこだわらないことも配慮すべきことといえます。また、この習慣づけは、生徒自身が厳しさを納得して訓練に耐えていけば比較的容易に身につけることが可能です。ですから、習慣づけさせるためには「強制力」が必要となってきます。

訓練をする際の注意すべき点を以下に挙げます。

1. 毎日時間を決めて、その時間になったら机の前に座ること。
2. 例外が重なって駄目になることが多いので、例外を絶対に作らない。ほんの少しでもよいので、やる。
3. 無理をしても長続きしないので、時間が来たら途中でも止める。15分ずつくらいの区切りをつけてやるのが適当でしょう。
4. 勉強の中身は、自分の好きなことや得意なことをやらせる。時には、小説や雑誌を読むなどしても良い。自分に合った本を見つけてそれを読むのが良い。
5. 不得意なことや嫌いなことを強制しないこと。

習慣づけにどのくらいの期間がかかるのかは個人差があるために一概には言えません。2~3ヶ月は継続させる必要があるでしょう。そうすればある程度変化が出てきます。継続させ、一旦習慣づけができてしまえば、どの生徒も落ち着きや集中力の面で顕著な変化が見られ習慣づけの大切さを実証することが出来ます。

これらのことがしっかり行われているか、そして行われていないならば何番が出来ていないのかを明らかにする必要があります。

以上で一般的な学習習慣の形成法について述べてきましたが、次に各象限(第Ⅰ~Ⅳ象限)の生徒への対応を具体的に考えていきます。

<Ⅰ・Ⅱ象限への対応>

Ⅰ、Ⅱ象限に属する生徒たちは、一般的に学習習慣もついていて、家庭学習や与えられた課題にも積極的に取り組む姿勢が見られます。ですから、学習習慣を付けさせるための訓練は何か支障が出ない限り特別しなくても大丈夫でしょう。

よって、基本的に学習習慣を付けさせる必要があるのは、Ⅲ、Ⅳ象限の生徒たちです。

<Ⅲ象限への対応>

この象限の生徒は基本的にはⅡ象限の生徒たちと同じタイプですが、相違点は学習習慣がついていないことです。このタイプの生徒の大部分は、小学生の頃はあまり勉強しなくても成績はそれほど悪くはありません。ただ、あまり勉強せずに学年が進んで、できない状況に陥っても依然として「自分はやらないだけだ。やればできる…」と現状を安易に解釈してしまっているのです。一般的にこのタイプの生徒は押し付けられたり指示されたりすることを嫌がる傾向があるので、じっくりと対話を進めていく中で、「実際にやること」と「やれば、という仮定」との違いを具体的に認識させることが大切です。この場合、「実際にやることは苦しさに伴う」などと端的な観点を示して話し合うことが意外に効果をあげます。その点で、自分で学習計画を作らせてそれを実際に実行する過程で、適切な指導を加えて計画が継続するよう力添えすることが大切です。また、この象限の生徒は自主性に富んでいて、好きなことに熱中する傾向があります。このことをうまく学習にいかせるよう工夫して、「新鮮さ」を大事にした指導が必要となってきます。

<Ⅳ象限への対応>

この象限の生徒は基本的にはⅠ象限の生徒たちと同じタイプですが、学習習慣がついていないという点が大きく違います。本来、この象限の生徒たちは、こつこつと努力して問題をこなすことで成績を上げていくタイプですが、学習習慣がついていないので、学年が進み教材が難しくなっていくにつれて学習不適應の状況を示すことが多くなってきます。このことにより学習意欲や学習に対する自信を喪失し「自分は駄目だ」と自分で思ってしまう生徒が多く存在します。

この象限に対する学習習慣の形成方法ですが、こちらはⅢ象限の生徒とは違って、こちらからの指導がものをいい、厳しいチェックも必要となってきます。厳しい訓練の中でしっかりと継続させることにより、すぐではないですが、必ず少しずつ学習習慣がついてきます。よって、この象限の生徒には学習習慣がついたと言えるまでじっくりと腰を据えて指導していくことが大切です。とにかく、自信回復をさせることが最重要となります。

②【今やっている学習内容の理解】

(1.わかる、ということ)

宿題を出してもやってこない生徒はいつでもいるものです。先生方は、「ルーズだから」とか「やる気がない」からだと考えて色々指導されるのが普通の姿といえましょう。しかし、学習内容が高度になってくると、宿題や課題をやってこない生徒の中には、「わからない」からやってこない生徒も多く存在しています。「わからない」ことが「わかる」になれば、学習も円滑に進むことでしょう。

では、「わかった」とはどのようなことをいうのでしょうか。それは、「先生の説明を聞いて、教材の意味が分かった」ということと「先生の説明が分かった」ということでしょう。このことから考えると、実際に「わかった」という生徒の中には、「本当に分かった」生徒と「分かったつもりになった」だけの生徒が混在していることがわかります。このことをしっかり頭に入れた上で指導しなくてはなりません。また、「わかる」ことは大事ですが、世の中には「わからなくてもできればよい」ことはいくらでもあるので、学校の勉強も「わかる」ことと「できる」ことをはっきり区別して「わからなくても、できるようにする」ことをまず考えるべきです。学校で教える教材の中でも、「わからせよう」と思わないで、「できるようにする」だけだったら、比較的簡単に教えることができるものがたくさんあります。その意味で、<わからせて→できるようにする>手順の指導法を<できるようにしてから→わからせる>手順の指導法に変えるだけでも、多くの生徒たちが「わからないことの積み重ね」から解放され、学習面での自信を回復する有効な手段となることがわかります。具体的には、問題解決型のⅡ・Ⅲ象限の生徒には<わからせて→できるようにする>指導法が、反復練習を得意とするⅠ・Ⅳ象限の生徒には<できるようにしてから→わからせる>指導法が向いています。ここで、両方の指導に共通すること、主には反復練習型の生徒に対することですが、「できるようにする」際に注意すべき点は生徒が間違っただけの手順を反復練習してそれを「自己流の方法」として定着してしまうことです。いったん間違っただけの方法が定着してしまうと、それを矯正するには非常に多くの時間と困難が伴います。その点で、反復練習させるときの最も重要な事柄は、この「間違っただけの方法」を早く発見して定着する前に正しい方法に戻してやることです。そのためには、小テストなどを実施して、間違っただけの生徒に対する誤答分析と課題の実施状況の厳しいチェックが生徒に反復練習を課する際の必須条件となってきます。

また、課題を出さないのはやる気のない生徒ばかりではありません。やろうと頑張ってもできない生徒は多々います。その点で、勉強させるためには、わからない生徒でも、やれるような工夫をしてあげることが必要であり、当進学会の講師の方はこのことを常に心がけていかななくてはなりません。

以上、学習内容の理解についてみてきましたが、次に、実際に学力を高めるための方策について考えます。

(2. 圧力釜方式について)

学力を高めるには、圧力釜方式(ある期間徹底して集中的に学習させる方式)は、大変適した方法です。これは、「勉強するための具体的な教材を与えて、それを集中的に、しかも徹底して勉強させる方策」であり、現在のように学科試験の出来具合が合否の条件になる入試制度では、この方策は効率のよい対策といえましょう。

しかし、圧力釜方式には、よい部分がある反面、欠陥も含んでいます。それは、「圧力を加えて学習させている間は高い学力を示しますが、一旦止めてしまうとその効果は継続しない」ことです。また、家庭学習を管理する場合に、生徒の持つ思考類型や学習に対する「自主性」や「自発性」さらには「自分で考える」という姿勢が欠如してしまうことすらあります。ただ、単位時間当たりの作業量を計る「入試」に合格するというところだけを考えれば、この方策は受験対策としては有効な方法といえます。その点で、夜遅くまで集中して勉強させている学習させている塾に通っている生徒が高い学力を示すのも当然の事といえましょう。しかし、この方策は先程述べたような欠陥も持ち合わせているので、生徒の学習を管理する際には、多様な教材を用意するなどの配慮が必要であり、その子に適した学習内容や方法が提案されることが最も望まれることでありましょう。

③【計画の継続】

勉強の成果が出るためには、半年なり1年の間、着実に勉強を継続させる必要があります。勉強していると成績が下がることもあります。このことを予め考慮した上で勉強を継続させることが必要です。勉強をする準備が整った生徒でも、その多くが、計画を立てても途中で計画を放棄して、勉強を止めてしまいます。その原因となっているのは、大部分が「自分はやればできるようになる」という有能感が持てないことです。ですから、この「継続する」ことの原動力となる有能感(自分はやればできると考えること)を抱かせることが重要となってきます。

では、それはどうやって抱かせるものでしょうか。

それは、「先生や親が暖かい言葉で激励をすること」です。成績が上がらなかつたり失敗したりしたときに、「運が悪かったからだ」とか「問題が難しすぎたから」だとかいって、次には可能性があることを示唆する対応が考えられます。また、「成績を期待しないで、力いっぱい頑張りなさい」など、結果を想定した指導が必要となってきます。そして、結果が悪かった生徒に対しても、「ここであきらめては駄目だ。今の調子で勉強を続ければ次には必ず期待できる結果がだせる。」という対応の仕方をして、「やればできる」という有能感を持ち続けさせるよう具体的な対策が重要となってきます。

勉強に対する意欲をなくさせてはいけません。生徒に意欲を持たせるような配慮、計画が継続できるような配慮が絶対必要となってくるのです。

④【成就感の体得】

人間誰もが、成就感や感激を味わうと、意欲や楽しみが増してきます。勉強も、成績がパッと向上したり、自分の立てた計画を遂行したという達成感や感激を味わったりすることが、「自分はやればできる」という有能感になり、それ以後の自発的な学習につながるものです。また、成就感を体験し、「やる気」が出てくれば、「勉強すること」自体がそれほど苦痛ではない状態になり得ます。夜遅くまで、塾に通っている小学生や中学生が「勉強が楽しい」と答えているのは、それらも成績が良くなり、成就感の裏打ちがあるために現状を苦痛と思わず、「楽しい」と感じることのできる境地にあると考えてよいでしょう。

以上、一人ひとりの生徒たちが意欲的に学習に取り組む、すなわち「やる気」を持って学習に取り組むまでの過程を述べてきましたが、最も大事なことは、要は「やってよかった」という成就感や喜びをどのようにして生徒たちに感じさせることができるか、ということに尽きます。

その点で、生徒を放任するのではなく、積極的に指示したり激励したりして、具体的な成果がでるまで努力を継続させていくことが大切になります。しかも、その具体的な対策を立てて、個々の生徒を指導する際に、思考類型を4象限に分けた「学習スタイル別指導」を実践していくことが、生徒に「やる気」を持って学習させることのできる最短経路のものであり、目指すべき方向であります。